

「吉祥寺東部エリアの地域生活に関する調査」結果報告

小山雄一郎

0 はじめに

本稿は、2017年4月から5月にかけて実施した「吉祥寺東部エリアの地域生活に関する調査」の結果について、主要な項目の単純集計およびクロス集計を中心に報告するものである。この調査では、調査対象者に対してすでに簡易版の結果報告書をお送りしてはいるものの、主要な結果全体の報告に関しては、対象地域での口頭報告会を2018年2月および8月に実施したのみとなっており、文書記録としての報告書を発行できないまま現在に至ってしまった。調査に協力してくださった対象地域の住民各位に深くお詫び申し上げるとともに、大変遅ればせながら、本稿をその報告書に代えさせていただく次第である。

1 調査の概要と経過

「吉祥寺東部エリアの地域生活に関する調査」は、調査票によるサンプル・サーベイであり、これは2016～17年度に玉川大学リベラルアーツ学部で開講された「社会調査実習Ⅰ・Ⅱ」の一環として実施されたものである。この実習では、東京都市計画道路外郭環状線の2（以下「外環の2」）の計画が検討されている沿線地域を対象として、コミュニティの状況、コミュニティバスと自転車を中心とする交通環境、子育て環境等について、量的／質的な複数の方法を用いて調査を実施した。

調査全体の主要な目的は、大規模道路計画の沿線住民の生活実態を把握することにより、計画の是非・方向性を検討するための基礎データを提示することであった。もちろん、計画検討のための各種資料・データは東京都をはじめとする行政からも示されてはきたが、そのほとんどは既存のマクロデータを加工したものに過ぎず、「外環の2」計画と直接関連する実態／意識調査はほぼ行われてこなかったといえる。

量的調査として実施された「吉祥寺東部エリアの地域

生活に関する調査」の実施概要は以下の通りである。まず母集団は武蔵野市内の「外環の2」の計画線上、およびそこから左右45メートルの範囲内に居住する全世帯とし、住宅地図を用いてそこからランダムに1,000世帯を抽出した。実査方法は戸別訪問による留め置き法とし、世帯主またはその配偶者に回答してもらった。回答票は郵便（着払い）で返送してもらうか、またはコミュニティセンターに設置した回収ボックスへ投函してもらうこととした。主な調査項目は、コミュニティでの生活状況、親交ネットワーク、日常生活における行動・活動圏、交通利用状況、「外環の2」に関する意識等である。有効回収票数は417票、有効回収率は41.7%であった。

2 回答者の基本プロフィール

表1から表6までは、この調査の回答者417名の基本プロフィールを示したものである。回答者の性別(表1)は5割ずつに近いが、若干女性のほうが多くなっている。年代(表2)では、「60歳代」(25.7%)と「70歳代」(24.0%)の合計が全体の約半数(49.7%)となっていることが特徴的である。世帯構成(表3)は、「親と子供のみ」から構成されるいわゆる核家族世帯が42.9%を占め、次点が「夫婦のみ」(27.1%)であった。「単身」世帯も15.1%存在し、「三世帯」(9.8%)よりも割合が高い。居住地区(表4)は「吉祥寺南町4丁目」(31.2%)、「吉祥寺南町3丁目」(29.7%)、「吉祥寺東町4丁目」(22.5%)の順に比率が高くなっている。居住年数(表5)は「5年未満」から「51年以上」までの間で比率が分散している傾向が見られるが、「11～20年」(19.7%)と「51年以上」(18.9%)の値が相対的にやや高いといえよう。世帯主の現職と前職(表6)について、まず現職を見てみると「無職(働いていない)」(32.4%)が最も多く、「管理職」(13.2%)、「企業などの経営者・役員」(12.9%)がそれに続く。前職は、現職が「無職(働いていない)」または「主婦(夫)専業」の人にのみ回答してもらった

男性	48.2
女性	50.8
不詳	1.0

20歳代	1.0
30歳代	5.3
40歳代	11.8
50歳代	18.7
60歳代	25.7
70歳代	24.0
80歳以上	12.5
不詳	1.2

単身（1人暮らし）	15.1
夫婦のみ	27.1
親と子供のみ（核家族）	42.9
三世代（親・子・孫）	9.8
その他	4.6
不詳	0.5

吉祥寺東町3丁目	3.4
吉祥寺東町4丁目	22.5
吉祥寺南町3丁目	29.7
吉祥寺南町4丁目	31.2
吉祥寺南町5丁目	12.7
不詳	0.5

5年未満	11.3
5～10年	10.8
11～20年	19.7
21～30年	14.6
31～40年	12.0
41～50年	12.2
51年以上	18.9
不詳	0.5

	現職	前職
企業などの経営者・役員	12.9	22.4
自営業主	8.6	9.3
管理職	13.2	32.9
専門・技術職	11.3	10.6
事務職	6.5	6.8
販売・サービス職	4.6	3.7
保安的職業	0.2	0.6
技能的・労務的職業	2.2	3.1
学生	0.0	2.5
主婦（夫）専業	4.8	5.6
無職（働いていない）	32.4	2.5
不詳	3.4	0.0

ものであるが、ここでも「管理職」（32.9%）、「企業などの経営者・役員」（22.4%）の比率が高い。この結果からは、社会経済的地位が高い世帯が相対的に多いことがうかがえる。

次節以降、調査結果を「コミュニティ」「親交ネットワーク」「生活圏」「交通利用状況」「『外環の2』」についての5つのテーマに分け、回答の単純集計、クロス集計、平均値の比較（一元配置分散分析）などによる集計・分析結果を概略的に見ていくこととする。なお、図表の表記について、以下の点に留意されたい。

第1に、図表に「n＝」という表記がない限り、集計・分析の対象となった回答数（サンプル数）は417である。第2に、「M.A.」という表記があるものは多重回答形式（＝当てはまるものすべてに○）の設問の集計結果である。第3に、平均値の比較（一元配置分散分析）以外の結果

に表された数値はすべて比率（%）を示している。第4に、クロス集計および平均値の比較（一元配置分散分析）は、カイ二乗検定またはF検定において $p < 0.05$ かそれを超える水準で統計的有意性が確認された結果のみを示すこととし、具体的なpの値は小数第三位まで提示する。

3 コミュニティ

3.1 コミュニティセンター

コミュニティについて検討する上で、武蔵野市において必ず着目すべきはコミュニティセンター（以下「コミセン」）の存在であろう。図1は、コミセンの利用目的について、今までで最も多かったものを回答してもらった結果である。「利用経験なし」を除くと、「イベント・催し物に参加するため」（21.1%）が最も多く、「会議・

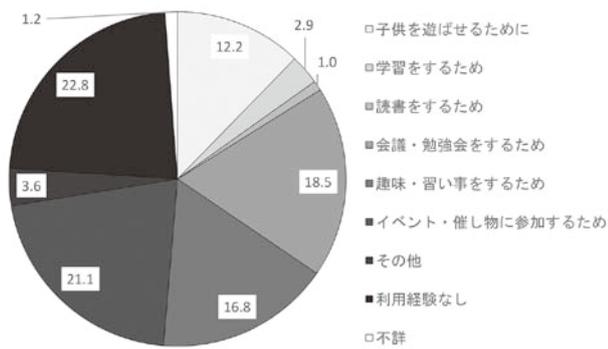


図1 コミュニティセンターの主な利用目的(最も多かったもの)

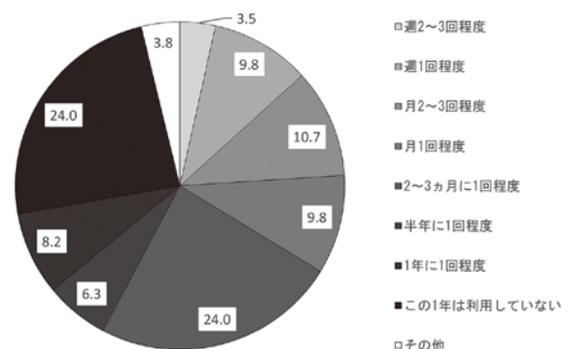


図2 この1年のコミュニティセンターの利用頻度 [n=316]

表7 年代×この1年のコミセン利用頻度

[$\chi^2 = 71.073/df = 40/p = 0.002/Cramer's V = 0.213$]

	週2~3回程度	週1回程度	月2~3回程度	月1回程度	2~3ヶ月に1回程度	半年に1回程度	1年に1回程度	利用していない	その他
30代 [n=12]	0.0%	16.7%	8.3%	16.7%	33.3%	8.3%	16.7%	0.0%	0.0%
40代 [n=42]	0.0%	4.8%	9.5%	23.8%	26.2%	7.1%	4.8%	21.4%	2.4%
50代 [n=51]	2.0%	0.0%	3.9%	2.0%	33.3%	7.8%	13.7%	33.3%	3.9%
60代 [n=81]	4.9%	3.7%	11.1%	7.4%	17.3%	6.2%	8.6%	34.6%	6.2%
70代 [n=84]	4.8%	16.7%	15.5%	7.1%	20.2%	8.3%	7.1%	17.9%	2.4%
80代以上 [n=43]	4.7%	23.3%	11.6%	9.3%	30.2%	0.0%	2.3%	14.0%	4.7%

勉強会をするため」(18.5%),「趣味・習い事をするため」(16.8%)がそれに続く。住民相互のコミュニケーションが伴う機会に参加する人が多いことがここからは読み取れる。

図2は過去1年間のコミセンの利用頻度の回答結果であるが、「この1年は利用していない」を除くと「2~3ヶ月に1回程度」(24.0%)の選択率が最も高く、その他は「週1回程度」から「月1回程度」までがそれぞれ10%前後となっている。全体としては、月1回程度以上利用する層、1年に数回利用する層、1年に1回利用するかどうかといった層が、それぞれ約3割前後ずつに分かれているようである。

過去1年のコミセンの利用頻度を年代別にクロス集計したものが表7である。特徴的な部分のみ確認すると、「80代以上」の「週1回程度」利用比率が23.3%と高く、「70代」(16.7%)と「30代」(16.7%)も相対的にはこの頻度での利用率がやや高い。「月2~3回程度」の結果では「60代」から「80代」までの数値がやや高くなっていることから、高頻度利用者層の中心が高齢者であることが読み取れる。ただし、「月1回程度」では「40代」(23.8%)と「30代」(16.7%)の比率がやや高く、単純

に高齢者ほどコミセンを利用しているというわけではない。

3.2 コミュニティ意識

「この地域の住環境を守るために住民は協力すべきだ」、「この地域のために何か役立つことがしたい」、「この地域に住んでいる人はお互いに何かと助け合って生活している」、「この地域の人々とより深くかかわっていきたい」という4つの命題を提示し、「そう思う」から「そう思わない」までの4段階(4件法)で回答してもらった結果を集計したものが図3である。すべての命題に対して過半数が肯定的な回答をしており、とりわけ「この地域の住環境を守るために住民は協力すべきだ」では実に9割以上が肯定的回答となった(「どちらかといえばそう思う」(47.5%) + 「そう思う」(45.8%))。ただし、「この地域に住んでいる人はお互いに何かと助け合って生活している」では否定的回答(合計42.9%)と肯定的回答(合計55.9%)がやや拮抗する結果となった。規範的意識やコミュニティへの貢献意欲は高くとも、相互扶助の実態に対する評価は幾分厳しいようである。

この4項目のコミュニティ意識について、「そう思う」

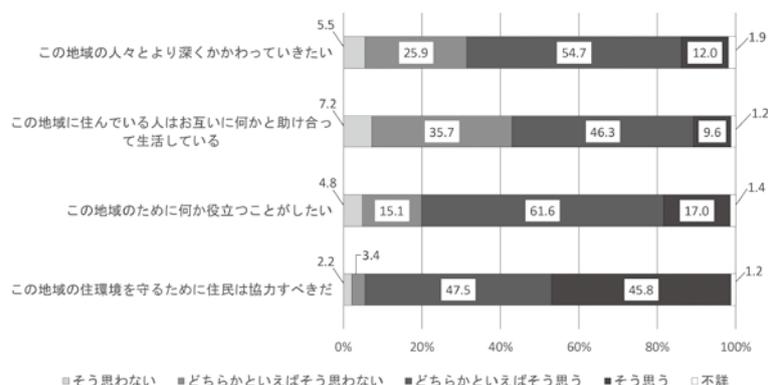


図3 コミュニティ意識

表8 この1年のコミセンの利用頻度×コミュニティ意識総合得点（平均値）

[F = 4.241/df = 8/p = 0.000]

週2～3回程度 [n = 11]	13.55
週1回程度 [n = 30]	13.03
月2～3回程度 [n = 33]	12.55
月1回程度 [n = 30]	11.67
2～3ヵ月に1回程度 [n = 75]	12.05
半年に1回程度 [n = 20]	10.75
1年に1回程度 [n = 25]	11.80
利用していない [n = 75]	11.48
その他 [n = 11]	10.82

を4点、「どちらかといえばそう思う」を3点、「どちらかといえばそう思わない」を2点、「そう思わない」を1点に換算し、4項目の得点を加算した「コミュニティ意識総合得点」という変数を作成した。この得点の要約統計量を示すと、最小値4、最大値16、平均値11.63、標準偏差2.208であり、図は省略するが、分布形状は比較的正規分布に近いものとなった。

表8は、コミュニティ意識総合得点の平均値をコミセンの利用頻度別に比較したものである。利用頻度と得点の間に完全な正の相関関係があるわけではないが、概ね利用頻度が高くなるほど得点が高くなる傾向が見受けられる。つまり、コミュニティに対する意識が強いほどコミセンの利用頻度も高いといえる。

3.3 近所づきあいの程度

ふだんの近所づきあいの程度を尋ねた結果を集計したものが図4である。「顔を合わせればあいさつする程度」(46.8%)と回答した人が最も多く、「立ち話をする程度」

(34.5%)が次点となった。全体としては、「立ち話をする程度」以上の関係か「顔を合わせればあいさつする程度」以下の関係かを分岐点として、回答が概ね半々に分かれている。

表9は回答者の居住年数別に近所づきあいの程度をクロス集計した結果である。細かな数値には言及せず、全体的な傾向のみ確認するならば、「立ち話をする程度」以上の関係は居住年数が長いほど比率が高くなる傾向にあり、逆に「顔を合わせればあいさつする程度」以下の関係は居住年数が短いほど高まる傾向にあるといえよう。

表10では世帯構成別に近所づきあいの程度をクロス集計している。特徴的なのは「ほとんどつきあいはない」の値が「1人暮らし」世帯で高くなっていることである(20.6%)。また、「たまには家に上がって世間話をする程度」では、「三世代」世帯の値(14.6%)が若干高い。

表11は、近所づきあいの程度別にコミュニティ意識総合得点の平均値を比較したものである。完全にではないにせよ、ほぼ近所づきあいの程度が親密であるほど得

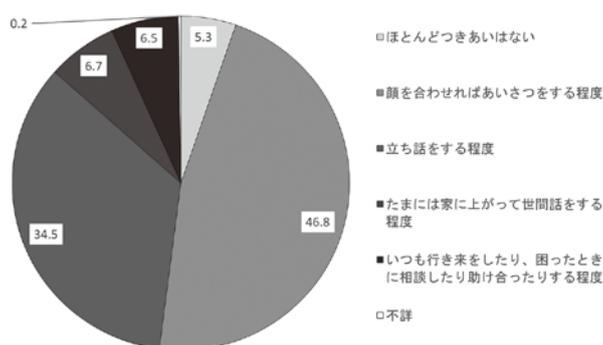


図4 近所づきあいの程度

表9 居住年数×近所づきあいの程度

[$\chi^2 = 51.053/df = 24/p = 0.001/Cramer's V = 0.175$]

	ほとんどつきあいはない	顔を合わせればあいさつをする程度	立ち話をする程度	たまには家に上がって世間話をする程度	いつも行き来をしたり、困ったときに相談したり助け合ったりする程度
5年未満 [n=47]	14.9%	63.8%	14.9%	2.1%	4.3%
5～10年 [n=45]	11.1%	53.3%	28.9%	4.4%	2.2%
11～20年 [n=82]	3.7%	53.7%	31.7%	6.1%	4.9%
21～30年 [n=61]	3.3%	54.1%	34.4%	4.9%	3.3%
31～40年 [n=50]	2.0%	44.0%	44.0%	6.0%	4.0%
41～50年 [n=51]	3.9%	29.4%	41.2%	11.8%	13.7%
51年以上 [n=79]	2.5%	32.9%	43.0%	10.1%	11.4%

表10 世帯構成×近所づきあいの程度

[$\chi^2 = 49.770/df = 16/p = 0.000/Cramer's V = 0.173$]

	ほとんどつきあいはない	顔を合わせればあいさつをする程度	立ち話をする程度	たまには家に上がって世間話をする程度	いつも行き来をしたり、困ったときに相談したり助け合ったりする程度
1人暮らし [n=63]	20.6%	42.9%	22.2%	4.8%	9.5%
夫婦のみ [n=112]	3.6%	43.8%	40.2%	8.0%	4.5%
親と子供のみ [n=179]	2.8%	51.4%	35.2%	5.0%	5.6%
三世帯 [n=41]	0.0%	39.0%	39.0%	14.6%	7.3%
その他 [n=19]	0.0%	52.6%	26.3%	5.3%	15.8%

表11 近所づきあいの程度×コミュニティ意識総合得点（平均値）

[F = 13.132/df = 4/p = 0.000]

ほとんどつきあいはない [n=20]	10.25
顔を合わせればあいさつをする程度 [n=194]	11.12
立ち話をする程度 [n=140]	11.93
たまには家に上がって世間話をする程度 [n=27]	13.30
いつも行き来をしたり，困ったときに相談したり助け合ったりする程度 [n=27]	13.04

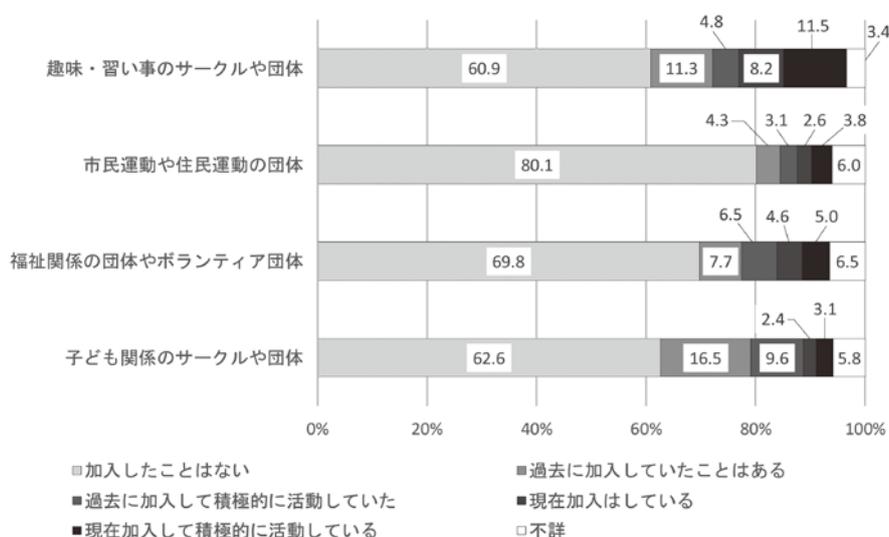


図5 地域団体への加入状況

点が高くなっていることがわかる。

3.4 その他

図5は、過去の経験も含め、各種地域団体への加入状況について尋ねた結果である。「子ども関係のサークルや団体」、「福祉関係の団体やボランティア団体」、「市民運動や住民運動の団体」、「趣味・習い事のサークルや団体」のいずれについても、「加入したことはない」の比率が最も高いが、過去も含めて加入経験がある人が相対的に多かったのは「趣味・習い事のサークルや団体」と「子ども関係のサークルや団体」であった。前者では「現在加入して積極的に活動している」(11.5%)の値が、後者では「過去に加入していたことはある」(16.5%)の値がそれぞれやや高くなった。

現在住んでいるところに今後も住み続けたいか否かを尋ねた結果を集計したものが図6である。「ぜひ住み続けたい」(53.2%)と「できれば住み続けたい」(32.6%)

を合わせると85.8%となり、全体的に現住地への居住継続意思が高い傾向が明確に表れている。

4 親交ネットワーク

この調査では、「日頃から何かと頼りにし、とても親しくつきあっている親類や友人・知人のうち、だいたい週に1回以上の頻度で直接会っている方」を回答者の親交ネットワークと位置づけ、「この地区内(同じ町丁内)」「この地区を除く武蔵野市内」「武蔵野市と隣接する他区市内」「前述以外の東京都内」「その他の道府県内」という5つの範囲別にその人数を回答してもらった。ここでは親類に関する結果は省略し、友人・知人の親交ネットワークを見ていくこととする。

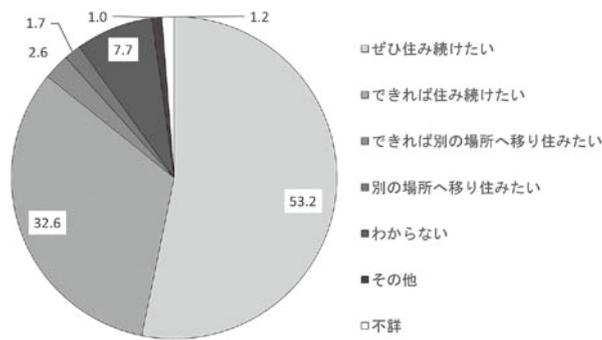


図6 現住所への居住継続意思

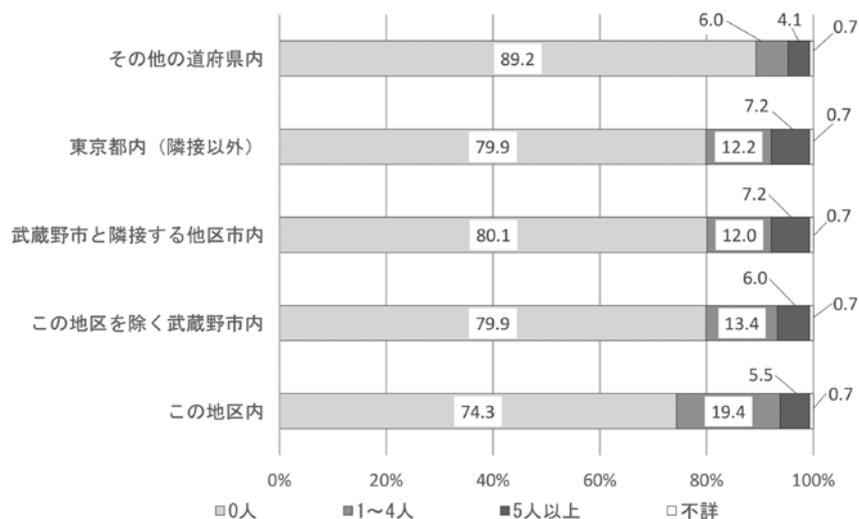


図7 週1回以上会う、日頃からとても親しくしている友人・知人の数

図7は、地理的範囲別に友人・知人の親交ネットワーク量を表したものである。回答では実数が記入されていたが、それを「0人」、「1~4人」「5人以上」へリコードした。いずれの範囲でも「0人」の比率が最も高いが、親交の深い友人・知人が1人以上いる比率で見ると、「この地区内」が24.9%（19.4% +5.5%）で最大値となっている。

年代別に地区内の親交友人・知人の数を確認してみると(表12), そうした人が1人以上いるか否かで見ただけの場合、「70代」(38.4%), 「80代以上」(25.5%), 「40代」(24.5%)の値が高くなっていることがわかる。「40代」では子育て・教育を介した関係性が、「70代」と「80代以上」では居住歴の中で蓄積してきた多様な関係性が想起できる。

表13は、この1年のコミセンの利用頻度別に地区内の親交友人・知人の数を表したものである。やはり該当者

が1人以上いるか否かで見ると、「2~3 ヶ月に1回程度」以上の頻度の場合、コミセンの利用頻度が高いほど親交友人・知人の保持率が高くなる傾向が概ね確認できる。この結果からは、コミセンが地区内の親交友人・知人を形成する媒介機関となっている様子がうかがえる。

表14は、近所づきあいの程度別に地区内の親交友人・知人の数を示したものである。同様に該当者の有無で確認すると、近所づきあいの程度が密接になるほど親交友人・知人の保持率が上がる傾向が概ね見られるようである。

表12 年代×地区内の親交友人・知人の数

[$\chi^2=21.872/df=12/p=0.039/Cramer's V=0.164$]

	0人	1~4人	5人以上
20代 [n=4]	100.0%	0.0%	0.0%
30代 [n=22]	81.8%	9.1%	9.1%
40代 [n=49]	75.5%	24.5%	0.0%
50代 [n=78]	78.2%	19.2%	2.6%
60代 [n=106]	82.1%	11.3%	6.6%
70代 [n=99]	61.6%	30.3%	8.1%
80代以上 [n=51]	74.5%	19.6%	5.9%

表13 この1年のコミセン利用頻度×地区内の親交友人・知人の数

[$\chi^2=45.789/df=16/p=0.000/Cramer's V=0.270$]

	0人	1~4人	5人以上
週2~3回程度 [n=11]	18.2%	63.6%	18.2%
週1回程度 [n=30]	46.7%	33.3%	20.0%
月2~3回程度 [n=34]	61.8%	32.4%	5.9%
月1回程度 [n=31]	64.5%	19.4%	16.1%
2~3ヵ月に1回程度 [n=76]	76.3%	17.1%	6.6%
半年に1回程度 [n=20]	70.0%	30.0%	0.0%
1年に1回程度 [n=26]	88.5%	7.7%	3.8%
利用していない [n=76]	78.9%	21.1%	0.0%
その他 [n=10]	80.0%	10.0%	10.0%

表14 近所づきあいの程度×地区内の親交友人・知人の数

[$\chi^2=85.623/df=8/p=0.000/Cramer's V=0.322$]

	0人	1~4人	5人以上
ほとんどつきあいはない [n=22]	95.5%	4.5%	0.0%
顔を合わせればあいさつをする程度 [n=194]	86.1%	11.3%	2.6%
立ち話をする程度 [n=142]	73.9%	19.7%	6.3%
たまには家に上がって世間話をする程度 [n=28]	25.0%	64.3%	10.7%
いつも行き来をしたり、困ったときに相談したり 助け合ったりする程度 [n=27]	33.3%	44.4%	22.2%

5 生活圏

この調査では、日常生活の中で最もよく訪れる場所(所在地)とその交通手段を、「日常生活で必要な食料品の買い物」、「食料品以外の日用品の買い物」、「家具や家電などの高価な買い物」、「ふだん行くことが多い病院・診療所」という4種類の目的別に尋ねている。

図8は、4種類の目的それぞれについて、最もよく訪れる場所(所在地)を集計したものである。「行くことが多い病院・診療所」以外の項目では、いずれも「吉祥寺駅周辺」が最高比率となっており、「食料品以外の日用品の買い物」(71.2%)と「家具・家電などの買い物」(77.7%)では7割を超えている。後者に関しては、吉祥寺駅から至近のところに大型家電量販店が複数存在することも影響していると思われる。「日常生活での食料品」

については、「吉祥寺駅周辺」(51.1%)の他に「西荻窪駅周辺」(25.7%)も相対的には比率がやや高いのが特徴的である。食料品の主要な購入先としてスーパーマーケット等があげられるが、回答世帯の所在地によっては西荻窪駅周辺のスーパーのほうが移動利便性が高いのであろう。病院・診療所の回答は比較的分散しており、「吉祥寺南町3丁目」(21.1%)の比率が高いのは、総合病院である吉祥寺南病院の存在によるところが大きいと考えられる。

図9は、4種類の目的について、移動手段を尋ねた結果をまとめたものである。いずれの目的でも「徒歩」と「自転車」の比率が高い。最も比率が低い「家具・家電などの買い物」でも「徒歩」(32.4%)と「自転車」(28.5%)の合計が約60%、最高値となった「食料品の買い物」では合計が約80%となった。調査対象地域における日

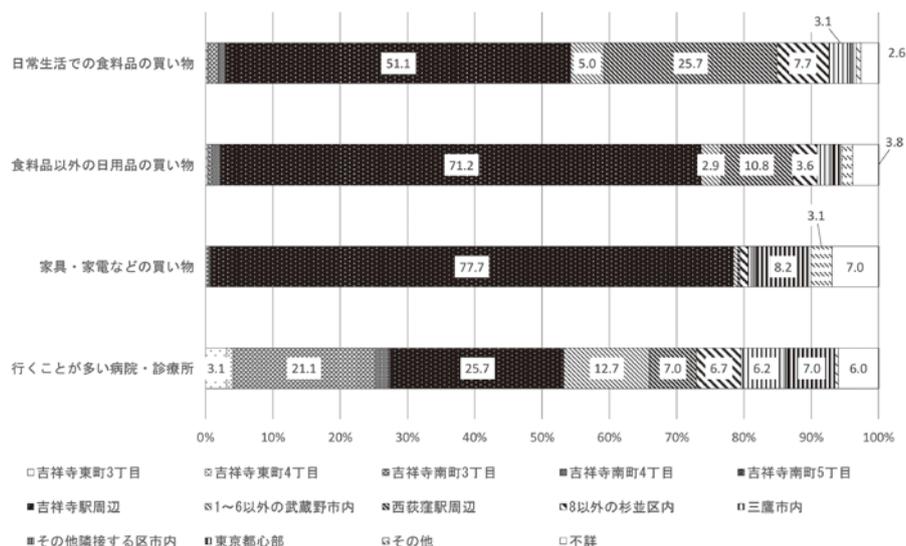


図8 日常生活における目的別の移動先(所在地)

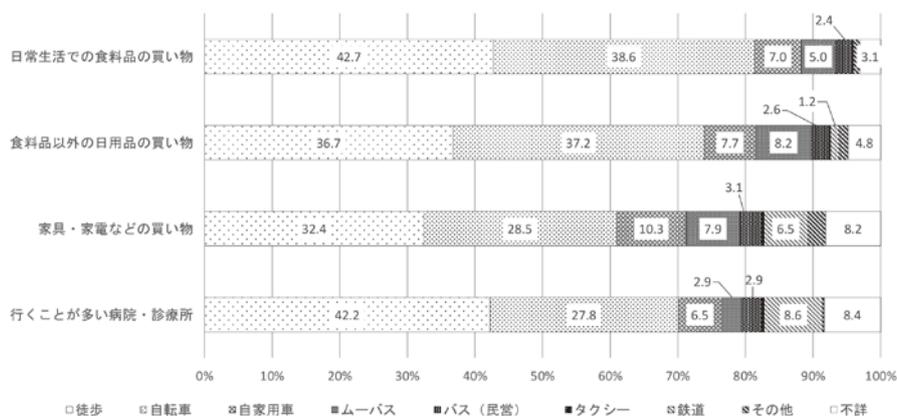


図9 日常生活における目的別交通手段

常生活上の主要交通手段が徒歩と自転車であることは明らかである。その他の交通手段に目を向けると、「家具・家電などの買い物」における「自家用車」(10.3%)、また「病院・診療所」における「鉄道」(8.6%)が若干高い数値となっている。前者は購入物の運搬の利便性が、後者は通院先の所在地がそれぞれ関連していると推察できよう。

次に、それぞれの目的について、回答世帯の居住地区と移動先の所在地との関係を見ていくこととする。表15は「日常の食料品の買い物場所」に関するクロス集計結果である。これによると、「吉祥寺東町4丁目」(63.4%)と「吉祥寺南町5丁目」(44.2%)では「西荻窪駅周辺」の比率が最高値となっており、その他の地区では「吉祥寺駅周辺」で最も高い値となっている。この2地区はJR中央線に近接しており、線路に沿った直線距

離では吉祥寺駅よりも西荻窪駅のほうが近い。主要交通手段が徒歩や自転車であることに鑑みれば、西荻窪駅周辺の店舗を選択するのも自然であるといえる。

表16に示した「日用品の買い物場所」の結果では、いずれの地区でも「吉祥寺駅周辺」の比率が最高値であるが、やはりここでも「吉祥寺東町4丁目」(27.2%)と「吉祥寺南町5丁目」(19.2%)では若干「西荻窪駅周辺」の値が高くなっている。

「行くことが多い病院・診療所の場所」の結果を表17で見ると、「南町3丁目」の病院・診療所を選択する比率が高いのが、同地区の「吉祥寺南町3丁目」(33.3%)と「吉祥寺南町4丁目」(26.0%)となっている。これには、徒歩・自転車での短時間移動圏に総合病院(吉祥寺南病院)があることが大きく関係しているといえよう。また、「吉祥寺南町3丁目」では「三鷹市内」(14.0%)

表15 居住地区×日常の食料品の買い物場所
[$\chi^2 = 172.331/df = 48/p = 0.000/Cramer's V = 0.327$]

	東町 3丁目	東町 4丁目	南町 3丁目	南町 4丁目	南町 5丁目	吉祥寺 駅周辺	他の 武蔵 野市内	西荻窪 駅周辺	他の 杉並 区内	三鷹 市内	他の 隣接する 区市内	東京 都心部	その他
吉祥寺東町3丁目 [n=14]	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	57.1%	7.1%	21.4%	14.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
吉祥寺東町4丁目 [n=93]	0.0%	0.0%	1.1%	0.0%	0.0%	23.7%	5.4%	63.4%	5.4%	0.0%	0.0%	1.1%	0.0%
吉祥寺南町3丁目 [n=119]	0.8%	0.0%	4.2%	0.0%	0.0%	67.2%	3.4%	4.2%	10.1%	9.2%	0.0%	0.0%	0.8%
吉祥寺南町4丁目 [n=126]	0.0%	0.0%	0.0%	3.2%	0.0%	66.7%	6.3%	13.5%	6.3%	0.8%	1.6%	0.0%	1.6%
吉祥寺南町5丁目 [n=52]	0.0%	0.0%	1.9%	0.0%	1.9%	32.7%	5.8%	44.2%	9.6%	1.9%	0.0%	1.9%	0.0%

表16 居住地区×日用品の買い物場所
[$\chi^2 = 101.983/df = 48/p = 0.000/Cramer's V = 0.253$]

	東町 3丁目	東町 4丁目	南町 3丁目	南町 4丁目	南町 5丁目	吉祥寺 駅周辺	他の 武蔵 野市内	西荻窪 駅周辺	他の 杉並 区内	三鷹 市内	他の 隣接する 区市内	東京 都心部	その他
吉祥寺東町3丁目 [n=14]	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	71.4%	7.1%	14.3%	0.0%	7.1%	0.0%	0.0%	0.0%
吉祥寺東町4丁目 [n=92]	1.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	59.8%	0.0%	27.2%	8.7%	0.0%	0.0%	2.2%	1.1%
吉祥寺南町3丁目 [n=114]	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	85.1%	3.5%	0.0%	3.5%	4.4%	0.9%	0.9%	1.8%
吉祥寺南町4丁目 [n=127]	0.0%	0.8%	1.6%	3.9%	0.0%	78.0%	3.1%	6.3%	0.8%	0.8%	1.6%	1.6%	1.6%
吉祥寺南町5丁目 [n=52]	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.9%	65.4%	5.8%	19.2%	3.8%	0.0%	0.0%	0.0%	3.8%

表17 居住地区×行くことが多い病院・診療所の場所

[$\chi^2 = 125.272/df = 48/p = 0.000/Cramer's V = 0.283$]

	東町 3丁目	東町 4丁目	南町 3丁目	南町 4丁目	南町 5丁目	吉祥寺 駅周辺	その他 の武蔵 野市内	西荻窪 駅周辺	その他 の杉並 区内	三鷹 市内	その他 隣接する 区市内	東京 都心部	その他
吉祥寺東町3丁目 [n=14]	14.3%	0.0%	7.1%	0.0%	0.0%	50.0%	7.1%	7.1%	7.1%	7.1%	0.0%	0.0%	0.0%
吉祥寺東町4丁目 [n=90]	11.1%	3.3%	8.9%	0.0%	1.1%	21.1%	15.6%	15.6%	14.4%	2.2%	0.0%	6.7%	0.0%
吉祥寺南町3丁目 [n=114]	0.0%	0.0%	33.3%	0.9%	0.0%	25.4%	12.3%	0.9%	6.1%	14.0%	0.9%	6.1%	0.0%
吉祥寺南町4丁目 [n=123]	0.0%	0.0%	26.0%	4.9%	0.8%	34.1%	10.6%	5.7%	2.4%	2.4%	0.8%	10.6%	1.6%
吉祥寺南町5丁目 [n=49]	2.0%	2.0%	18.4%	2.0%	0.0%	20.4%	20.4%	12.2%	6.1%	8.2%	2.0%	6.1%	0.0%

の比率も他地区に比べてやや高く、三鷹市との隣接地区であることが影響していると思われる。

6 交通利用状況

6.1 自家用車の利用

図10は、世帯で自家用車を所有しているか否かを尋ねた結果である。「所有している」が61.2%、「所有していない」が37.4%となった。今回の調査対象地域は、コミュニティバス（ムーブス）も含めて公共交通の利便性が比較的高いところであるが、敷地の広い一戸建て住宅も多く、しかも一定以上の社会経済的地位にある人々の世帯も多い地区であることから、このような所有比率となったと推察される。

図11は、自家用車所有世帯のみに対して利用頻度を尋ねた結果である。半数弱（47.4%）は「月に1～5回程

度利用する」と回答しており、「週に2,3回程度利用する」（24.9%）がそれに続く。この結果からわかるように、自家用車を所有してはいるものの、毎日運転するほどの日常的な「足」として利用してはいる世帯が大半のようである。週末のレジャーなど、どちらかといえば非日常的な用途で自家用車を利用するケースのほうが多いのかもしれない。

6.2 居住地区の交通状況

この調査では、居住地区の交通状況について「主要道（幹線道路）が混雑していて不便である」、「住宅街の小道（生活道路）に車が進入して危険である」、「最寄駅までの交通アクセスがよくない」、「自転車の通行が多く、歩行時に危険を感じる」という4項目の命題を提示し、それに対する認識を「そう思わない」から「そう思う」までの4段階（4件法）で回答してもらった。

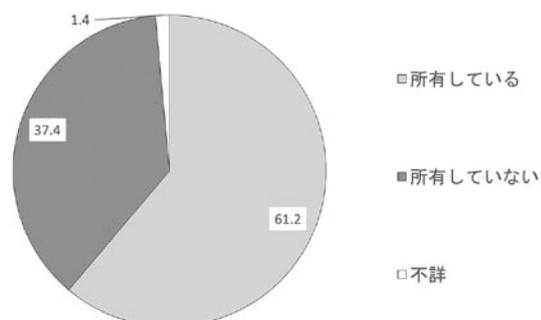


図10 自家用車の所有

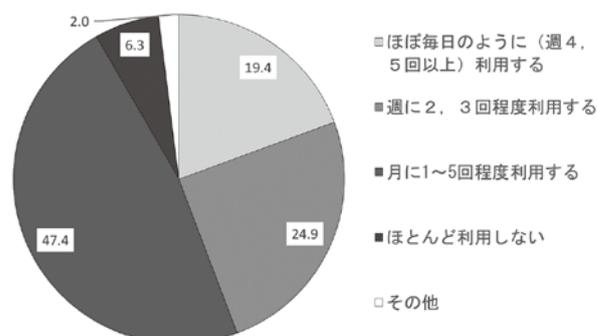


図11 ふだんの自家用車利用頻度 [n=253]

その回答結果をまとめたのが図12である。「最寄駅までのアクセスがよくない」のみ、「そう思わない」(47.7%),「どちらかといえばそう思わない」(33.8%)という否定的回答が合計で8割を超える結果となったが、その他の項目では回答比率が分散傾向にあることがわかる。そこで、居住地区別にクロス集計してみたところ、「住宅街の小道(生活道路)に車が進入して危険である」と「自転車の通行が多く、歩行時に危険を感じる」の2項目についてのみ、統計的に有意な結果が確認された。

表18は、「住宅街の小道(生活道路)に車が進入して危険である」に対する回答を居住地区別に集計した結果である。危険認識度が相対的に高い(=肯定的回答の比率が高い)のは「吉祥寺東町3丁目」(50.0%+14.3%=64.3%)と「吉祥寺東町4丁目」(35.1%+24.5%=

59.6%)であった。逆に危険認識度がそれほど高くないのは「吉祥寺南町3丁目」(22.7%+10.1%=32.8%)である。この結果の背景として考えられるのは、吉祥寺駅および主要幹線道路と当該地区との位置関係であり、その差異が生活道路の“抜け道”利用頻度を左右すると思われる。

表19は、「自転車の通行が多く、歩行時に危険を感じる」に対する回答の居住地別集計結果である。こちらで危険認識度が高い(=肯定的回答の比率が高い)のは「吉祥寺南町5丁目」(35.8%+34.0%=69.8%)であり、「吉祥寺南町4丁目」(29.1%+22.0%=51.1%)がそれに続く。

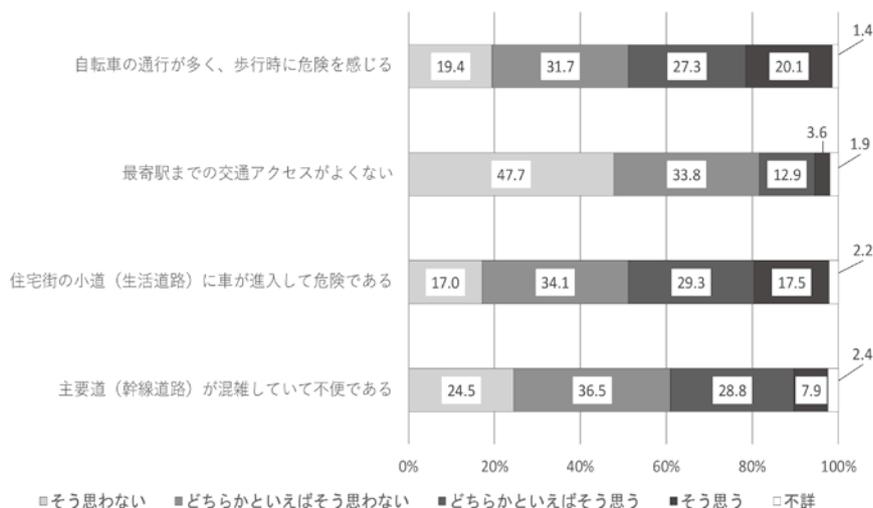


図12 居住地区の交通状況に対する認識

表18 居住地区×「住宅街の小道(生活道路)に車が進入して危険である」

[$\chi^2=24.935/df=12/p=0.015/Cramer's V=0.143$]

	そう思わない	どちらかといえ ばそう思わない	どちらかといえ ばそう思う	そう思う
吉祥寺東町3丁目 [n=14]	0.0%	35.7%	50.0%	14.3%
吉祥寺東町4丁目 [n=94]	14.9%	25.5%	35.1%	24.5%
吉祥寺南町3丁目 [n=119]	20.2%	47.1%	22.7%	10.1%
吉祥寺南町4丁目 [n=127]	18.9%	29.9%	32.3%	18.9%
吉祥寺南町5丁目 [n=52]	17.3%	36.5%	23.1%	23.1%

表19 居住地区×「自転車の通行が多く、歩行時に危険を感じる」

[$\chi^2=30.773/df=12/p=0.002/Cramer's V=0.158$]

	そう思わない	どちらかといえ ばそう思わない	どちらかといえ ばそう思う	そう思う
吉祥寺東町3丁目 [n=14]	7.1%	50.0%	14.3%	28.6%
吉祥寺東町4丁目 [n=94]	19.1%	36.2%	35.1%	9.6%
吉祥寺南町3丁目 [n=121]	24.0%	38.0%	17.4%	20.7%
吉祥寺南町4丁目 [n=127]	21.3%	27.6%	29.1%	22.0%
吉祥寺南町5丁目 [n=53]	11.3%	18.9%	35.8%	34.0%

6.3 最寄駅までのアクセス

図13は、ふだん最もよく利用する鉄道駅を回答してもらった結果である。「吉祥寺駅」が56.1%で最も多く、「西荻窪駅」の33.8%が次点となっている。これは、先に確認した買い物等の生活圏の結果ともリンクしていると考えられよう。

最もよく利用する鉄道駅を居住地区別に集計した結果が表20である。「西荻窪駅」の利用率が高いのは「吉祥寺東町4丁目」(78.7%)と「吉祥寺南町5丁目」(56.6%)であり、これも先の日常生活圏の結果に添ったものである。また、「吉祥寺南町3丁目」で「三鷹台駅」(24.4%)の利用率が相対的に高いのも生活圏（特に病院・診療所の結果）における傾向と同様である。

図14では、鉄道駅までの交通手段が多重回答形式で集計されている。多重回答であるため、「徒歩」(78.7%)が圧倒的に多いのは当然であるが、約4割弱が「自転車」(37.3%)を利用していることが特徴的である。これもまた生活圏における結果と整合するものであろう。加えて、比率としてそこまで高いとはいえないものの、民間路線バスよりもコミュニティバスである「ムーバス」(16.7%)の利用率のほうが高い点にも言及しておきたい。

6.4 ムーバス

この調査では、ムーバスの「よい点」と「悪い点」について、12の共通項目をあげた上でそれぞれ当てはまるものすべてに○をつけてもらった（多重回答形式）。その12項目は「運賃」、「バリアフリー」、「運転手の対応」、「バス停と家との距離」、「時刻表通りの運行」、「バスの本数」、「バス停の間隔」、「バスの混雑具合」、「バスの運行ルート」、「座席の数」、「ほぼ利用しないのでわからない」、「その他」である。

図15はその集計結果をまとめたものである。「よい点」

のトップ3は「運賃」(70.6%)、「バス停と家との距離」(46.0%)、「時刻表通りの運行」(41.7%)であった。一方、「悪い点」のトップ3は、「その他」を除くと「バスの運行ルート」(22.7%)、「座席の数」(16.9%)、「バスの本数」(13.3%)であった。数値を見ればわかるように、全体的に「よい点」の選択率が「悪い点」よりも高くなっている。

12の共通項目について、回答者1人あたりの「よい点」の選択数と「悪い点」の選択数の差を算出し、それを「ムーバスに対する総合評価得点」とした。この得点の要約統計量は、最小値-4、最大値9、平均値1.67、標準偏差2.282であった。

表21は、この総合評価得点の平均値を居住地区別に比較したものである。「吉祥寺東町3丁目」(2.43)と「吉祥寺南町3丁目」(2.35)では値が高く、「吉祥寺南町4丁目」(0.98)と「吉祥寺南町5丁目」(0.96)では低いのがわかる。おそらく、吉祥寺東循環路線（1号路線）のバス停の配置状況が、利用しやすい地区とそうでない地区の差異を生み出し、このような結果をもたらしたと思われる。

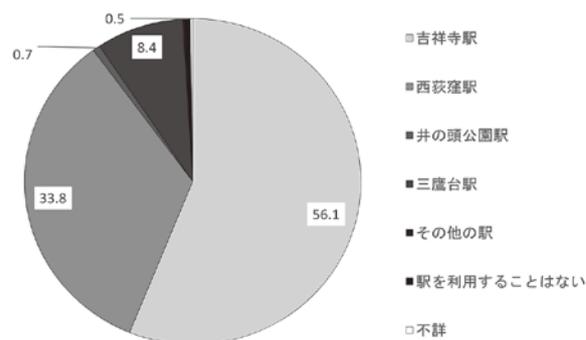


図13 最もよく利用する近くの鉄道駅

表20 居住地区×最もよく利用する近くの鉄道駅

[$\chi^2 = 199.198/df = 20/p = 0.000/Cramer's V = 0.347$]

	吉祥寺駅	西荻窪駅	井の頭公園駅	三鷹台駅	その他の駅	駅を利用することは ない
吉祥寺東町3丁目 [n=14]	64.3%	35.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
吉祥寺東町4丁目 [n=94]	21.3%	78.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
吉祥寺南町3丁目 [n=123]	68.3%	4.1%	2.4%	24.4%	0.0%	0.8%
吉祥寺南町4丁目 [n=130]	73.8%	20.8%	0.0%	3.8%	0.8%	0.8%
吉祥寺南町5丁目 [n=53]	43.4%	56.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

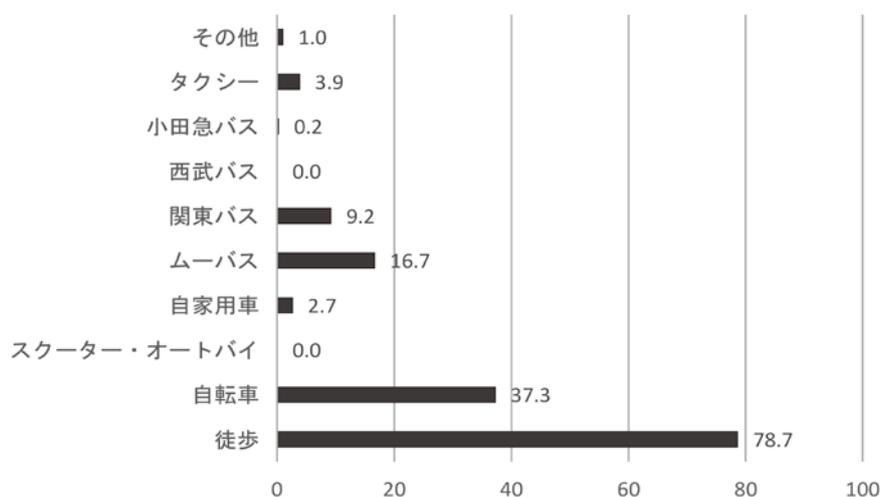


図14 鉄道駅までの交通手段 [M.A./N=413]

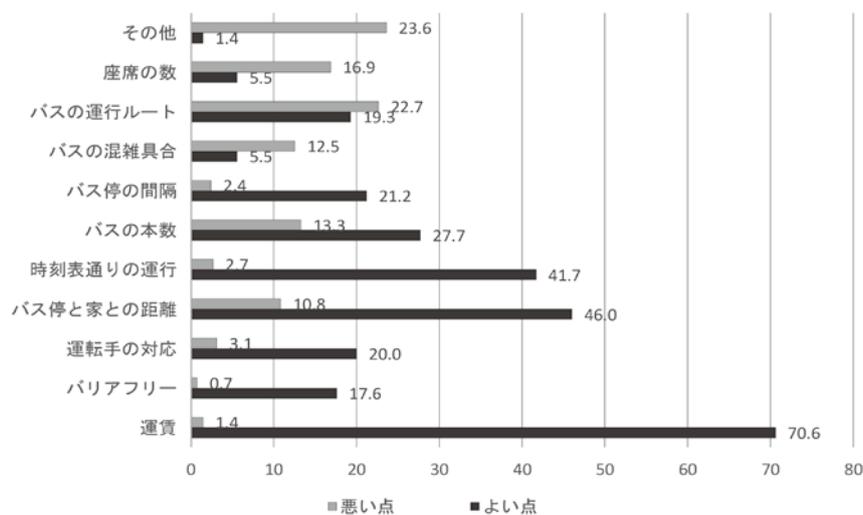


図15 ムーバスに対する評価 [M.A./N=415]

表21 居住地区×ムーバスに対する総合評価得点（平均値）

[F = 8.312/df = 4/p = 0.000]

吉祥寺東町3丁目 [n = 14]	2.43
吉祥寺東町4丁目 [n = 94]	2.00
吉祥寺南町3丁目 [n = 123]	2.35
吉祥寺南町4丁目 [n = 129]	0.98
吉祥寺南町5丁目 [n = 53]	0.96

7 「外環の2」について

7.1 計画に関する知識とその入手先

図16は、「外環の2」に関する基本的な知識の認知度を測る設問の回答結果である。1966年に都市計画決定された東京外かく環状道路(以下「外環道」)においては、高架構造の自動車専用道路部分の地上部側道として「外環の2」も同時に計画決定がなされていた。その後、外環道は2007年の都市計画変更により大深度地下方式を利用する計画・事業となったが、地上部街路としての「外環の2」計画は残存することとなり、この調査の実施時点では沿線区市ごとに計画の方向性の検討が続いている状況であった。一方、外環道についてはすでに事業がスタートしていた。

上記の経過・状況について、外環道建設が事業中であることは回答世帯の92.1%が認知している。しかし、「外環の2」が立ち退きを伴う計画として残存していることを認知している世帯は64.3%に過ぎない。外環道が大深度地下方式を採用した時点で、地上部には何も影響がな

いと認識した人々が一定数いることが、ここからは推察される。

図17は、「外環の2」計画について知っていることを、「何も知らない」を含めた10項目の中から多重回答形式で答えてもらった結果を集計したものである。認知率のトップ3は「道路の計画線の位置（ルート）」(46.8%)、「計画が存在することのみしか知らない」(35.0%)、「道路の幅員」(27.8%)となっている。「外環の2」は外環道の地上部に整備される計画となっているため、外環道計画の知識をある程度持っている人ならば、「外環の2」のルートや幅員も理解している可能性は高いと思われる。

ここであげた10項目をもとに、回答者1人あたりの認知項目数をカウントし、その平均値を居住年数別に比較したのが表22である。居住年数が「21～30年」(1.98)と「31～40年」(1.88)との間で若干の逆転はあるものの、ほぼ居住年数が高いほど「外環の2」計画に関する認知項目が多くなっていることがわかる。

図18は、「外環の2」計画を認知している世帯のみを対象として、住居と計画線との位置関係を回答しても

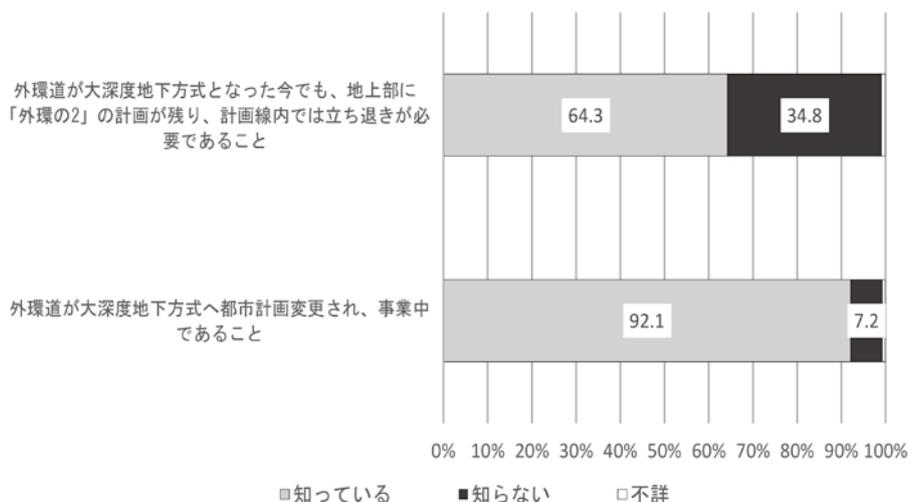


図16 計画・事業の認知度

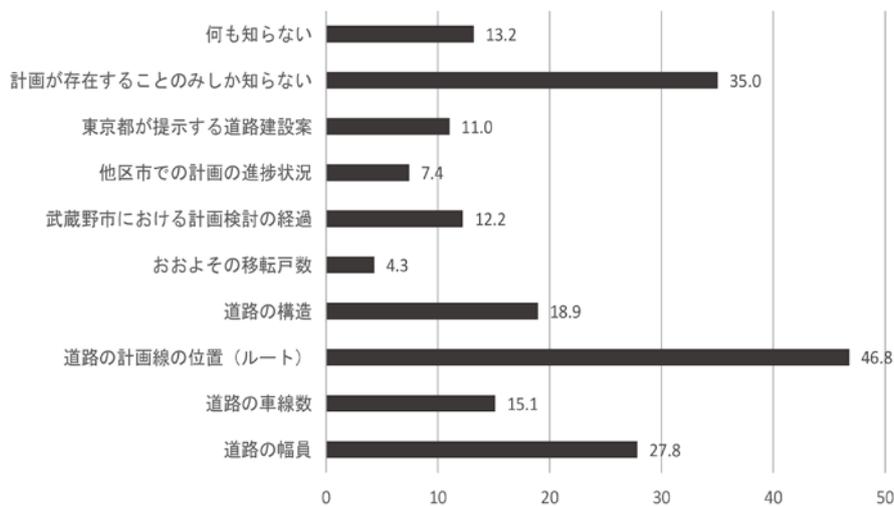


図17 「外環の2」について知っていること [M.A.]

表22 居住年数×「外環の2」について知っていることの数 (平均値)

[F = 4.134/df = 6/p = 0.000]

居住年数	人数 (n)	平均値
5年未満	47	1.09
5～10年	45	1.44
11～20年	82	1.49
21～30年	59	1.98
31～40年	50	1.88
41～50年	51	2.06
51年以上	78	2.41

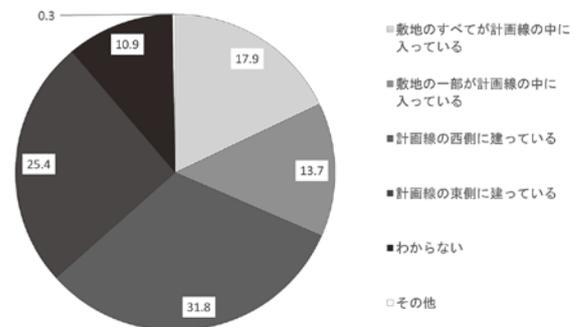


図18 住居と「外環の2」の計画線との位置関係 [N=358]

らった結果である。⁽¹⁾「すべてが計画線の中に入っている」(17.9%)と「一部が計画線の中に入っている」(13.7%)を合計すると、約3割(31.6%)が計画線の影響を直接受ける世帯ということになる。また、「計画線の西側に建っている」世帯が31.8%、「計画線の東側に建っている」世帯が25.4%となっており、「『外環の2』の計画線上とその左右45メートルの範囲内」というこの調査の世帯抽出エリアがほぼそのまま反映された結果であるといえよう。

図19は、何(誰)を通じて「外環の2」に関する情報を入手しているかを、多重回答形式で回答してもらった結果をまとめたものである。選択率のトップ3は「市報むさしの」(41.9%)、「行政による配布チラシ」(38.7%)、「住民による配布チラシ」(33.0%)であった。この他、「コミュニティセンター(配布チラシを含む)」も29.6%という低くない選択率となっている。コミセンも含め、地

域住民による情報提供機会が機能しているのが、今回の調査対象地域の特徴であると思われる。

図19に示された「外環の2」に関する情報入手先について、回答者1人あたりの入手先の数カウントし、その平均値を居住年数別に比較したのが表23である。一部数値が逆転してはいるものの、先の認知項目数と同様、居住年数が長いほど「外環の2」計画に関する情報入手先の数が多い傾向が、概ね確認できる。

7.2 計画に関するコミュニケーション機会

図20は、「外環の2」計画を管轄する東京都が沿線住民とのコミュニケーション機会を設ける必要性について、内容を2つに分けて尋ねた設問の集計結果である。いずれの機会に対しても回答傾向はほぼ似通っており、「大いに必要」「どちらかといえば必要」を合わせた値を見ると、「計画に関する説明をする機会」では88.6%

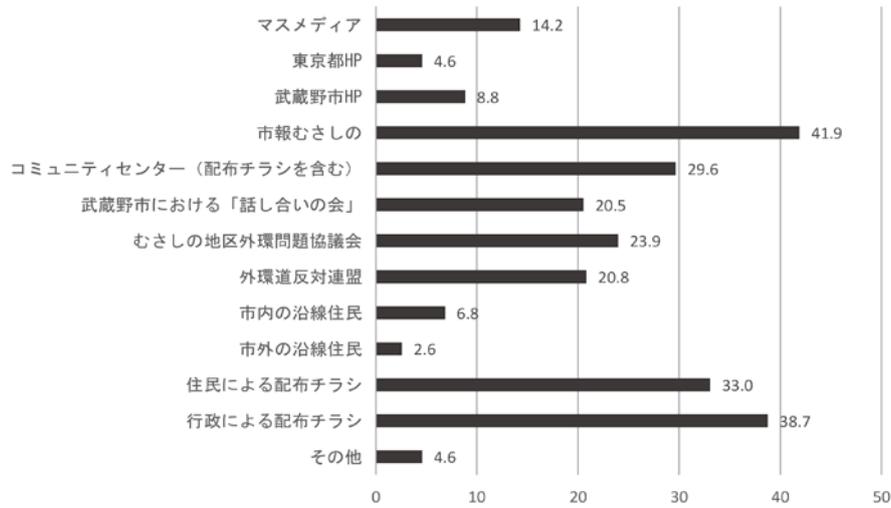


図19 「外環の2」についての情報の入手先 [M.A./N=351]

表23 居住年数×「外環の2」についての情報入手先の数（平均値）

[F=3.377/df=6/p=0.003]

5年未満 [n=30]	1.73
5～10年 [n=34]	2.12
11～20年 [n=65]	2.17
21～30年 [n=54]	2.63
31～40年 [n=43]	2.60
41～50年 [n=48]	3.00
51年以上 [n=75]	2.83

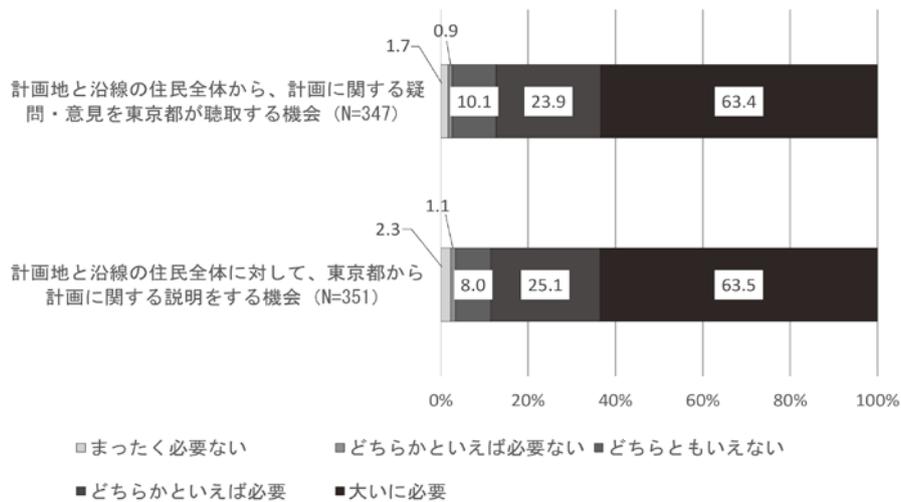


図20 住民とのコミュニケーション機会の必要性

(63.5% +25.1%), 「計画に関する疑問・意見を聴取する機会」では87.3% (63.4% +23.9%) と、非常に高い比率が出ている。このように、東京都が沿線住民とのコミュニケーション機会を設けることを求める世帯は非常に多いといえる。

7.3 計画の効果と影響に対する認識

この調査では、「外環の2」計画がどのような効果(≒メリット)をもたらすと考えられるか、また逆にどのような影響(≒デメリット)をもたらすと考えられるかを、それぞれ「その他」も含めて8項目の選択肢を提示し、多重回答形式で答えてもらっている。なお、それぞれ「効

果(よい点)は何もない」と「影響(悪い点)は何もない」という選択肢も設定した⁽²⁾。

まず図21は効果についての回答の集計結果である。「効果(よい点)は何もない」(51.0%)が目立っているが、その他では「周辺道路の渋滞が緩和する」(23.1%)の比率がやや高く、それ以外の項目についてはいずれも2割以下の選択率であった。

次に、影響に関する回答結果をまとめたのが図22である。トップ3は「交通量の増加により、大気汚染が進む」(64.9%)、「交通量の増加により、騒音が増える」(64.6%)、「交通量の増加により、事故の危険性が増す」(48.9%)となった。その他の項目でも選択率が3割を超

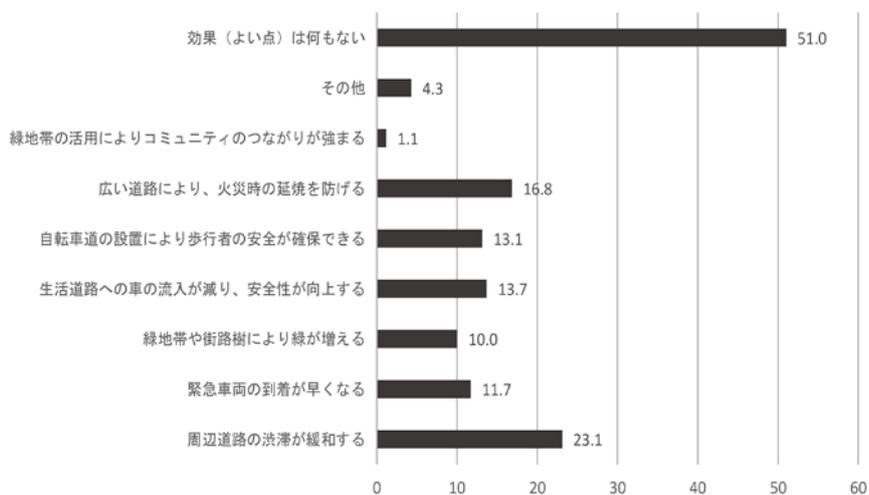


図21 「外環の2」がもたらすと考えられる効果 [M.A./n=351]

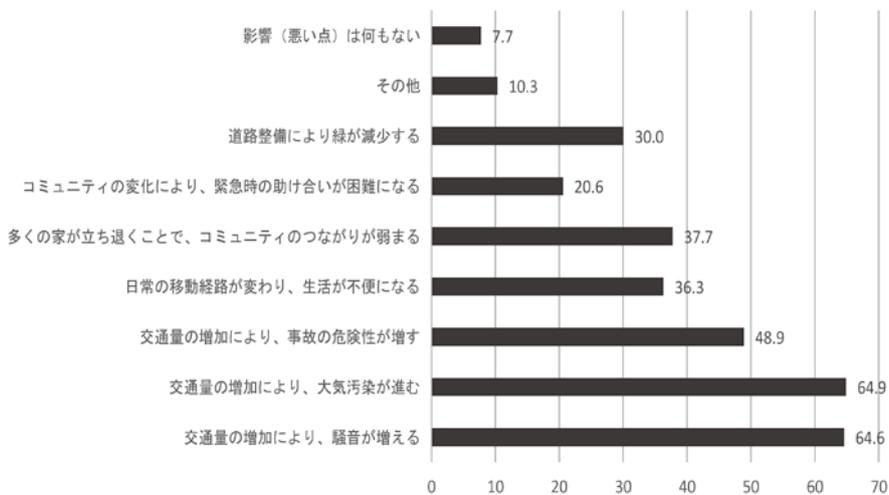


図22 「外環の2」がもたらすと考えられる影響 [M.A./n=350]

えるものが多く、効果に関する回答とは対照的な結果であるといえる。

先の「外環の2」の効果と影響について、回答者1人につき、効果項目の選択数と影響項目の選択数の差を算出し、それを「『外環の2』総合評価得点」として変数化した。この得点の要約統計量は、最小値-8, 最大値6, 平均値-2.19, 標準偏差2.758であり、ヒストグラムを確認したところ、概ね正規分布に近い分布形状となった。

表24は、この総合評価得点の平均値を「この地域の住環境を守るために住民は協力すべきだ」という命題への回答結果別に比較したものである。住環境保守への協力規範意識と総合評価得点との間に全体的な負の相関関係はないものの、「そう思う」で最小値の-2.95が、「そう思わない」で最大値の2.33が記録されていることは留意すべきであろう。

同様に、「この地域の人々とより深くかかわっていききたい」という命題への回答結果別に「外環の2」総合評価得点の平均値を比較したのが表25である。こちらでは「そう思わない」で最大値の-1.11, 「そう思う」で最小値の-2.96という値となり、なおかつコミュニティへの関与意欲と総合評価得点との関係全体に負の相関が認められた。

図23は、「外環の2」整備後の生活しやすさについて現時点での予測を回答してもらった結果である。「とても生活しづらくなる」(28.3%)と「どちらかといえば生活しづらくなる」(21.4%)を合計すると約5割(49.7%)となり、約半数が街路整備後の生活状況に不安を抱えている様子がうかがえる。ただし、41.1%が「どちらともいえない」と回答していることから、現段階では「外環の2」整備による具体的な効果・影響を予測することが難しいと考える世帯が多いのかもしれない。

「外環の2」整備後の生活しやすさについて、近所づきあいの程度別に集計した結果が表26である。全体では明確な相関関係は見られないものの、「とても生活しづらくなる」という回答においては「ほとんどつきあいはない」(0.0%)から「いつも行き来をしたり、困ったときに相談したり助け合ったりする程度」(46.2%)に至るまで、近所づきあいの程度が親密になるほど比率が高くなっている。

また、表27では、「この地域の人々とより深くかかわっていききたい」というコミュニティへの関与意欲と「外環の2」整備後の生活しやすさとの関係をクロス集計している。ここでもまた全体的な相関関係は認められないものの、「とても生活しづらくなる」については「そう思う」(42.6%)で最高比率となり、「どちらかといえばそう思わない」(18.9%)と「そう思わない」(21.1%)の間で値の逆転はあるものの、関与意欲が高いほど「外環の2」整備後の生活への不安感も高まる傾向が概ね見受けられる。

また、表27では、「この地域の人々とより深くかかわっていききたい」というコミュニティへの関与意欲と「外環の2」整備後の生活しやすさとの関係をクロス集計している。ここでもまた全体的な相関関係は認められないものの、「とても生活しづらくなる」については「そう思う」(42.6%)で最高比率となり、「どちらかといえばそう思わない」(18.9%)と「そう思わない」(21.1%)の間で値の逆転はあるものの、関与意欲が高いほど「外環の2」整備後の生活への不安感も高まる傾向が概ね見受けられる。

表24 「この地域の住環境を守るために住民は協力すべきだ」×「外環の2」総合評価得点(平均値)

[F=14.215/df=3/p=0.000]

そう思わない [n=6]	2.33
どちらかといえばそう思わない [n=12]	-2.58
どちらかといえばそう思う [n=162]	-1.53
そう思う [n=166]	-2.95

表25 「この地域の人々とより深くかかわっていききたい」×「外環の2」総合評価得点(平均値)

[F=3.396/df=3/p=0.018]

そう思わない [n=19]	-1.11
どちらかといえばそう思わない [n=90]	-1.69
どちらかといえばそう思う [n=187]	-2.33
そう思う [n=47]	-2.96

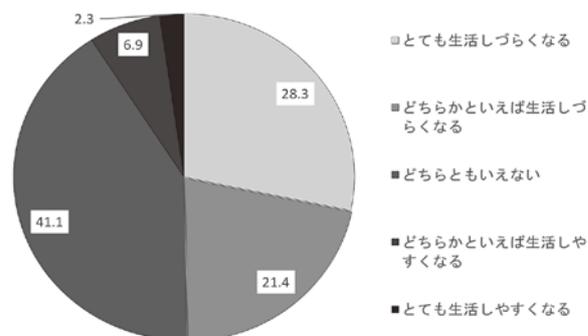


図23 「外環の2」整備後の生活しやすさ [n=350]

表26 近所づきあいの程度×「外環の2」整備後の生活しやすさ

[$\chi^2=27.110/df=16/p=0.040$ /Cramer's V=0.139]

	とても生活し づらくなる	どちらかといえば 生活しづらくなる	どちらとも いえない	どちらかといえば 生活しやすくなる	とても生活し やすくなる
ほとんどつきあいはない [n=8]	0.0%	12.5%	62.5%	25.0%	0.0%
顔を合わせればあいさつをする 程度 [n=167]	24.6%	21.0%	41.9%	7.8%	4.8%
立ち話をする程度 [n=122]	29.5%	27.0%	38.5%	4.9%	0.0%
たまには家に上がって世間話を する程度 [n=26]	38.5%	11.5%	46.2%	3.8%	0.0%
いつも行き来をしたり、困った ときに相談したり助け合ったり する程度 [n=26]	46.2%	11.5%	38.5%	3.8%	0.0%

表27 「この地域の人々とより深くかかわっていきたい」×「外環の2」整備後の生活しやすさ

[$\chi^2=24.285/df=12/p=0.019$ /Cramer's V=0.153]

	とても生活し づらくなる	どちらかといえば 生活しづらくなる	どちらともい えない	どちらかといえば 生活しやすくなる	とても生活し やすくなる
そう思わない [n=19]	21.1%	0.0%	57.9%	15.8%	5.3%
どちらかといえばそう思わ ない [n=90]	18.9%	30.0%	38.9%	8.9%	3.3%
どちらかといえばそう思う [n=189]	30.2%	20.6%	42.3%	5.8%	1.1%
そう思う [n=47]	42.6%	17.0%	34.0%	2.1%	4.3%

7.4 計画に対する賛否

図24は、計画に対する賛否を「絶対に反対」から「大いに賛成」までの5段階（5件法）で尋ねた結果を示している。「絶対に反対」が41.4%で最も比率が高く、「どちらかといえば反対」(22.7%)と「どちらともいえない」(22.7%)が同率で次点となっている。「絶対に」と「どちらかといえば」を合計した反対意見は64.1%となり、賛成意見（9.6%+3.7%=13.3%）よりも大幅に比率が高いことがわかる。

計画に対する賛否を近所づきあいの程度別に集計した結果が表28である。「絶対に反対」に着目すると、「立ち話をする程度」(48.4%)と「たまには家に上がって世間話をする程度」(46.2%)との間に値の逆転はあるが、「ほとんどつきあいはない」(0.0%)から「いつも行き来をしたり、困ったときに相談したり助け合ったりする程度」(61.5%)まで、近所づきあいの程度が親密にな

るほど「絶対に反対」の回答率が概ね上昇する傾向が見られる。

また、表29が示すのは、先にも触れた「この地域の人々とより深くかかわっていきたい」というコミュニティへの関与意欲と、計画への賛否をクロス集計した結果である。ここでは、「絶対に反対」の回答率が「そう思わない」(21.1%)から「そう思う」(51.1%)にかけて上昇していく傾向が明確に見られたといえる。

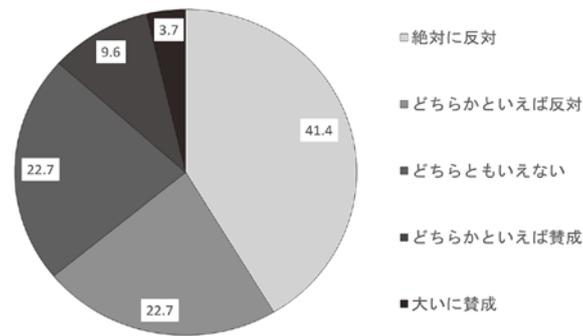


図24 「外環の2」整備に対する賛否 [n=353]

表28 近所づきあいの程度 × 「外環の2」の整備に対する賛否

[$\chi^2 = 29.417/df = 16/p = 0.021/Cramer's V = 0.145$]

	絶対に反対	どちらかといえば 反対	どちらともいえない	どちらかといえば 賛成	大いに賛成
ほとんどつきあいはない [n=8]	0.0%	12.5%	62.5%	12.5%	12.5%
顔を合わせればあいさつをする程度 [n=168]	34.5%	26.8%	21.4%	10.7%	6.5%
立ち話をする程度 [n=124]	48.4%	19.4%	23.4%	8.1%	0.8%
たまには家に上がって世間話をする程度 [n=26]	46.2%	23.1%	23.1%	7.7%	0.0%
いつも行き来をしたり、困ったときに相談したり助け合ったりする程度 [n=26]	61.5%	15.4%	15.4%	7.7%	0.0%

表29 「この地域の人々とより深くかかわっていきたい」 × 「外環の2」の整備に対する賛否

[$\chi^2 = 23.154/df = 12/p = 0.026/Cramer's V = 0.149$]

	絶対に反対	どちらかといえ ば反対	どちらともいえない	どちらかといえ ば賛成	大いに賛成
そう思わない [n=19]	21.1%	15.8%	42.1%	15.8%	5.3%
どちらかといえばそう思わない [n=91]	29.7%	27.5%	23.1%	13.2%	6.6%
どちらかといえばそう思う [n=189]	46.6%	21.7%	22.2%	7.9%	1.6%
そう思う [n=47]	51.1%	23.4%	17.0%	2.1%	6.4%

8 まとめと若干の補足

8.1 コミュニティについて

今回の調査対象地域では、コミセンの利用頻度、近所づきあいの程度、地区内の親交友人・知人の有無、コミュニティ意識といったコミュニティ変数のいくつか、居住者の年代や居住年数などに関連していたが、一方でコミュニティ変数同士が相互に関連している傾向も確認された。この点について、コミュニティ変数相互の偏相関を見てみたところ、図25のようになった。

偏相関は、他の変数の影響をコントロールした上での2変数間の（純粋な）相関関係を示している。図25の通り、4つのコミュニティ変数のすべての2変数間において、5%~0.1%水準で統計的に有意な偏相関が認められた。つまり、コミュニティ変数のそれぞれが相互に純粋な効果を与え合っているということになる。関係の強さを表す偏相関係数を見ると、「近所づきあいの程度」と「地区内の親しい知人・友人の有無」の間の値（0.223）が最も大きい。また、「コミセンの利用頻度」と「地区内の親しい知人・友人の有無」の間の係数（0.215）もそれに近い値となっている。この結果からは、地区内の人々を結びつける結節機関としてコミセンが大きな役割を果たしていることが読み取れる。

8.2 行動圏と交通利用について

今回の調査結果からは、対象地域の日常生活における多くの移動が、吉祥寺駅周辺から西荻窪駅周辺までの東西方向のものであり、その主要な移動手段が徒歩または

自転車であることが判明した。また、生活道路への流入交通や、自転車の歩行者に対する危険性など、交通状況に対する評価は地区によって差異が見られた。さらに、ムーブスに対する評価は概ね高いといえるが、ルートとの位置関係から、やはり地区によって評価に差異が見られた。

日常的な東西移動が顕著に見られる吉祥寺南町5丁目や東町4丁目では、「外環の2」が整備されれば従来の移動経路が分断される可能性があり、それによって交通状況はもちろんのこと、居住者の日常的な移動をめぐる生活構造も変化すると思われる。調査対象地域に高齢の世帯主（またはその配偶者）が多いことを踏まえると、生活構造の変化が居住者に予想以上の身体的／精神的負担をもたらす場合もありうる。「外環の2」計画の検討にあたっては、こうしたことも配慮すべきであろう。

8.3 「外環の2」について

外環道本線事業と比較して、「外環の2」計画の認知度はそれほど高くないようである。計画に関する知識量は、居住年数と概ね正の相関関係にあり、計画についての情報入手先の数においても同様の関係が確認された。

沿線住民全体を対象とする東京都からの説明機会、および意見聴取機会については、8割以上の住民が必要性を認めており、この回答傾向は居住年数や居住地区に左右されるものではなかった。

「外環の2」計画の効果（≒メリット）と影響（≒デメリット）に対する主観的評価から構成した総合評価得点の結果を見ると、計画に対する評価は全体的に低い。

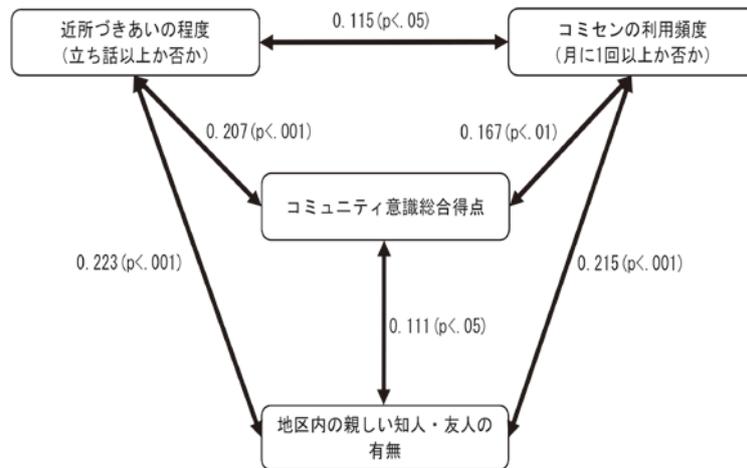


図25 コミュニティ変数間の偏相関

また、その評価得点と性別、年代、職種、計画線との位置関係といった諸属性との関連は認められず、計画についての知識量と情報入手先の数以外では、ほぼコミュニティ意識を中心としたコミュニティ関係の変数のみが評価得点へ有意に影響していることが明らかとなった。この点について、「地区内の親しい友人・知人の有無」以外の3つのコミュニティ変数、計画に関する知識量、計画についての情報入手先の数と、計画に対する総合評価得点との間の相関関係を確認したのが表30である。

6つの変数の中のいずれの2変数間でも統計的に有意な正または負の相関関係が認められたが、「『外環の2』計画に対する総合評価得点」との関係では、特に「『外環の2』についての情報入手先の数」(-0.258)と「コミュニティ意識総合得点」(-0.215)の相関係数の絶対値が大きい。また、総合評価得点と他の5変数との偏相関を確認したところ、「情報入手先の数」(-0.157)と「コミュニティ意識総合得点」(-0.145)との偏相関関係のみ1%水準で統計的有意性が認められた。いずれも総合評価得

点との間に負の偏相関関係があることから、計画に関する情報をより多種の機関・相手から入手している人ほど、またコミュニティ意識が高い人ほど、「外環の2」計画に対する評価が低いということになる。

分析結果は割愛したが、「『外環の2』計画に対する総合評価得点」の高低と、街路整備後の生活しやすさの予測、また計画に対する賛否の回答結果は強く関連していた。したがって、沿線住民は「外環の2」計画に対してただ漠然と賛否を表明しているのではなく、計画のメリットとデメリットを考量した上で賛否の意思決定をしていると推察される。そしてその考量内容(≒総合評価得点)は、計画に関する情報源の多様性とコミュニティに対するコミットメントの度合いに左右され、両者が大きいほど計画に対する評価が低くなるのである。ただし、今回の結果報告ではあくまでも基礎的な集計・分析を重ねたに過ぎないため、「外環の2」計画に対する評価および賛否をめぐる正確な因果連関については、多変量解析によってあらためて明らかにする必要があるだろう。

表30 「外環の2」総合評価得点の相関分析

	「外環の2」に対する総合評価得点	「外環の2」について知っていることの数	「外環の2」についての情報入手先の数	コミセン利用頻度(月1回以上ダミー)	近所づきあいの程度(立ち話以上ダミー)	コミュニティ意識総合得点
「外環の2」に対する総合評価得点	1	-0.155	-0.258	-0.166	-0.155	-0.215
有意確率		0.004	0.000	0.002	0.004	0.000
n		348	342	345	348	342
「外環の2」について知っていることの数		1	0.402	0.232	0.210	0.104
有意確率			0.000	0.000	0.000	0.036
n			350	410	413	406
「外環の2」についての情報入手先の数			1	0.211	0.258	0.216
有意確率				0.000	0.000	0.000
n				347	350	343
コミセン利用頻度(月1回以上ダミー)				1	0.229	0.239
有意確率					0.000	0.000
n					413	405
近所づきあいの程度(立ち話以上ダミー)					1	0.279
有意確率						0.000
n						408
コミュニティ意識総合得点						1

注

- (1) これ以降, 「外環の2」に関する集計結果はすべてこの道路計画を認知している世帯のみを対象としたものである。
- (2) 効果を示す項目は, 東京都が示している「外環の2」

の主要な整備効果を, 影響を示す項目は, 筆者のこれまでのフィールド調査から把握した住民の主要な懸念事項を, それぞれ反映させたものである。

(こやま ゆういちろう)